

2026（令和8）年度
総合型選抜(12月期)
学費免除型

総合文化学部・地球市民学部

国語

10時～11時

受験についての注意

試験開始の前に、以下の注意をよく読んでおくこと。

1. 試験開始の合図のあるまで、この冊子を開かないこと。
2. この冊子の問題本文は10ページである。試験開始後、問題を確認し、落丁・乱丁の箇所があるときは手をあげて交換を求めること。
3. 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはシャープペンシルで記入すること。
4. 試験開始の前に、解答用紙の定められた位置に氏名、受験番号および志望学部・領域名を記入すること。
5. 解答は解答用紙の指定された場所に記入すること。解答用紙の余白・裏面には何も書いてはならない。
6. 筆記用具、受験票以外のものは、かばん等に入れ、机の下に置くこと。
7. 試験時間中に無断で退場することはできない。
8. 終了の合図があったら、ただちに筆記用具を置き、解答用紙は表を上にして置くこと。この冊子(試験問題)は持ち帰ってよい。

一 次の文章を読んで、あとの設問に答えよ。〔60点〕

伊勢神宮で、式年遷宮が行なわれる理由として、掘立の柱や茅葺の屋根が二十年以上もたないからだと一般にいわれている。そこで少し調べて見たところ、掘立柱はともかく、屋根の方は、二十年はおろか数年でだめになることがわかった。

A 湿気で草屋根にカビが発生し、このカビを食料とする虫、さらにこの虫を食べるネズミが巣をつくり、イタチやテンがネズミをとらえようともぐりこみ、空からはタカやトビが屋根をけちらし、数年にしてメチャクチャにされる。ために、昔は、ご神体の上のるのはおそれ多いというので、職人に黒衣装をつけさせてカラスに見立て、たびたび屋根を葺きなおしていた。現在では、薬品を散布して、第一原因であるカビの発生を防いでいるという。

農家ではこのようなことは起こらない。それは密閉されている伊勢神宮と違って通風がよいこともあるが、それよりも、イロリの煙が、虫やネズミをいぶし出し、乾燥を助けるとともに、草屋根の下層部分を燻製にしてしまうからであった。

私たちは、農家の屋根から煙が立ちのぼっているのを見て、生活のいぶきを感じるものだが、それは住人たちの生活とともに、建物それ自身も生き続けていることのシルシであろう。

それゆえ、農家には天井がなく、見上げると、露出された大きな梁が組み上げられ、頂上の煙出しから一条の光が差し込んでくる。その構築的な空間の迫力はゴシックの伽藍をすら思わせる。とくに中部の山岳地帯から関東西北部や奥羽にかけてのいわゆる養蚕農家の中には、他の日本建築にはちよつと見られないほどの壮大さのものがある。こういういった農家は、当然屋根も巨大で、襲いかかる自然の力も激しい。

雨の多い地方では、屋根の傾斜がきつくなって大きく伸び上がり、逆に積雪地帯では、雪が下をゆく人の上にすべ

り落ちないように勾配をゆるやかにするとともに、軒下を歩けるように軒がぐつと張り出して、抱きかかえるようなカタチとなる。

私も何回か蓑みのを着た経験があるが、からだが大きくふくれ上がって、さあなんでもこいという気になった。農民たちも自分の家に、そのような印象をもったであろう。自然がきびしければ、農家も大きく、たくましくならなければならぬ。**B** そうなればなるほど、自然も強い試練を与えよう。原始の竪穴たてあな住居からこの絶えざる繰返くりかへしによって、農家は²しだいに生きものとしてのカタチを整えていったに違いない。

農家は、かま首をもたげて嵐にほえ、北風を背にして雪の中で人びとを抱きかかえ、また太陽に向かってあくびをし、薫風に大きく息を吸った。私たちが、農家の造形に感動することがあるとすれば、それは古く過ぎ去った過去の思い出があるからではなくて、現在も「生きている造形」だからである。あるいは、大きなずうたいをもてあまして、もはや地球上から姿を消そうとしている巨竜のようなものかも知れないが、それにしても懸命に生き続けようとしている姿が、私たちに尊く映るのである。

(中略)

農家は、いま史上最大の試練にたち向かっている。伊勢ほどではないにしても、草葺が不経済であることから、しだいにカワラやトタンに葺き替えられている。現在、それがいかほどつまらないものに見えようとも、生きものとしての真実はかえってそこにある。私たちは、いくたびか試練を乗り越えてきた民家を信じてよいだろう。事実棟押むせえに乗せたブリキの先を切り、折り曲げて造られた棟飾りなどに、農民たちの驚くべき創意を見いだすことがある。

人間のつくったカタチは、すべて生きていたし、今もカタチを変え生き続けている。日本の伝統から、そういった生存の秘密を探り出すことが、ほんとうの日本を発見することだと私は思うのである。

伊勢神宮で、二十年ごとに社殿を建て替えてきたということは理由のいかんを問わず、建築そのものを永久に保存

しようと思っていなかった証拠である。カタチのあるものは必ず滅びる。つまり生者必滅の堅い信念を日本人は古くからもつていたに違いない。日本人が、なんとしても残そうと努力したのは、建築ではなくその様式、すなわちカタチでなくてカタチだったのである。

様式を長く伝えることにおいて式年遷宮ほど確実な手段はない。しかし古代に伊勢神宮が創立されたころには、カシナも縦引きのノコギリもなかったから、もつと粗野で荒々しいものであったに違いない。現在の輝くばかりの造形は数十回に及ぶ建替^{たてか}えのたびごとに加えられた、棟梁^{とうりょう}たちによる少しずつの改良の蓄積の結果であることは言うまでもない。

このように厳格に守られた様式が、社会の発展によって、造形技術などのそれぞれの要素に分割され、いくつもの系列のカタチが生み出された。芸術・技術・武道・作法など、なにによらず、日本ほどカタチをやかましく教え込むところはなないだろう。にもかかわらずカタチにとらわれてはならないと説教される。カタチにとらわれてはカタチにならないのである。

カタチとは、いうまでもなくカタ・チだろう。そして神話学者、松村武雄によれば、チとは、血、乳、風、霊などであって、神以前の霊的な存在態だという。風はコチ（東風）、ハヤチ（疾風）のチであり、霊は、タチ（田霊）、ミズチ（水霊）のチだという。これを見れば、チという言葉が、エネルギーといったような生命の根源的なものを意味していたことは明らかだ。とするなら、伝承されてきたカタという原則に、それぞれのおかれた状態で、生命を付加したとき、それがカタチになるというわけだ。

こういったものの代表は、おそらく“いけばな”であろうが、“いけばな”とは、花をいける、つまり生かす意であろうか。その原則はしごく簡単なもののように、天地人などとよばれる三本の枝による単純な空間構成であり、これは三次元の方向、つまりX軸、Y軸、Z軸を示すものである。

こういつてしまおうと味もそっけもないが、もともとカタとは、味もそっけもないものなのである。それを微妙に枝をたわめたとき、のびゆく生命力が空間の中にイメージされることとなる。こうしたカタが社会的なものとして、あらゆる面に無数に存在するようになったとき、その無限の組合せくみあわせによって、滅ぶべきカタチを、社会それ自身の流れの中で、変貌させ、発展させる方法を、日本人は体得したようである。そのもつとも良い例が苔寺の名で知られた西芳寺庭園であろう。

夢窓国師がつくったといわれる西芳寺庭園は、樹木の枝を綱で引き、十分に剪定せんていし、地に白砂をまき、十数の庭園建築を配置するとともに、地形を整えるため古墳をあばくことまであえてした、かなり作意の強いものであった。そしてまたサクラの名所として知られていた。

ところが応仁の乱で、ほとんど全焼し、たびたび洪水にあい、またサクラは、マツその他の樹木に駆逐され、いつしか地面はコケでおおわれた。長い歴史の間に、この庭園が雑草で埋まったことは何度もあった。だが、そのたびに、なに人かが現われ、草を抜き、かれた池に水を引き、岩を起こした。それゆえ、西芳寺庭園は、いくたびかその面影を変えている。しかも、いつの世にあっても、その名は天下の名園として聞こえていた。つまりそれは、人と自然とが協力して造ってきた新陳代謝するデザインだった。

このようなことが可能だったのは、あらゆる条件を生かして、カタチをつくることのできる数多くのカタを日本人が生み出していたからだと思える。これは急激な社会変化の中で、都市を絶えず改造し、新陳代謝していかなければならない私たちにとって、十分検討してみる価値があるろう。

西芳寺とは逆に、カタを味もそっけもなく投げ出したものが龍安寺石庭りゅうあんじである。人はこれを見て、海に浮かぶ島とも、雲海から顔を出した山の峰々とも、どう想像してもよろしい。つまり、**X**はながめる人が勝手につけなさい、というわけだ。ところが、このような造形は、よほどの確にカタが組み立てないと、人びとのイメージを起こさせ

ない。

これも私たちに一つの教訓になる。たとえば、最近の建築家は、よく家具まで設計しないと自分の建築は生きてこないと主張する。C、どう住まおうと、住む人の勝手のはずだ。そしてほんとうに的確に造形された空間であるなら、人びとは、それぞれの個性に従いながらも、そこでの生活のイメージを、ありありと思いつかべさせるような空間であるはずだからである。そしてこのような空間は、生活内部の変貌をも、ガツチリと受けとめるだろう。つまり龍安寺石庭は、カタチとなったカタチであった。とするなら西芳寺の秘密も、そのときどきの適応の仕方にあっただけでなく、それが十分なしうるようなカタチが、夢窓による全体的な構想の中に明確なカタチとなって生き続けていたのであろう。

(川添登『建築と伝統』より)

(注) ○式年遷宮——伊勢神宮で、二十年ごとにお宮を建て替え大御神おおみかみにお遷りうつり頂くこと。

○掘立の柱——礎石を用いず地面に穴を掘って直接立てた柱。

○ゴシック——十二〜十四世紀のヨーロッパで、建築などの美術において流行した様式。

○棟押え——屋根の頂部を補強のため覆っている金物など。

○夢窓国師——鎌倉時代末から南北朝時代、室町時代初期にかけての臨済宗の禅僧。作庭・漢詩・和歌に通じた文化人でもあった。

問1 空欄 A 〽 C に入れるのに適切な語句を、それぞれ次の①〜⑤の中から一つずつ選んで、その番号を書

け。(同じ番号を二度選んではならない。)

- ① あるいは
- ② というのは
- ③ しかし
- ④ そして
- ⑤ ところで

問2 傍線部1「生活のいぶき」のここでの意味の説明として、最も適切なものを次の①〜⑤の中から一つ選んで、

その番号を書け。

- ① 人の命が育まれる崇高さ
- ② 人が現に暮らしている活気
- ③ 人がこっそり隠れ住む気配
- ④ 人が平穩に過のどかす長閑さ
- ⑤ 人が逆境に耐えて生きる力強さ

問3 傍線部2「しだいに生きものとしてのカタチを整えていった」とはどういうことか、五十字以内で説明せよ。

問4 空欄 X に入る適切な文中の語句を、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号を書け。

- ① カタチ ② カタ ③ チ ④ 個性 ⑤ 造形

問5 傍線部3「ほんとうの日本」とあるが、筆者は日本の本来あるべき伝統的なカタとカタチについて、どのように考えているか。次のア～オのそれぞれについて、筆者の考えと合致する場合は①、合致しない場合は②の番号を書け。

ア カタを体得した上で、その時代ごとの社会や環境等にかな適うよう、必要に合わせて変えていくのがカタチである。

イ 普通なら滅ぶはずのカタチを日本人は様々な技術や工夫によって残し、不滅のものとして生き残らせることができる。

ウ カタチは必ず滅びるものであるために、カタチの根源となるカタは創意工夫によって残し、しっかりと守り抜かねばならない。

エ 伝統的なカタに基づき複数のカタを組み合わせることで種々変貌するカタチが実現する一方で、出来上がったカタチ自体がカタを既に内包していることもある。

オ 西芳寺庭園と龍安寺石庭は、前者がカタを重視しカタチを変え、後者がカタを顧みずカタチが不変な点で対照的だが、カタとカタチが融合することで両者の美は共通する。

二 次の文章を読んで、あとの設問に答えよ。〔40点〕

昔、伊勢ときこえし歌詠みの女、世の中過ぎわびて、都にも住みうかれなむとして、世に¹経べきたづきもなく侍りけるが、太秦にこもりて、心を澄ましつつ、²つとめなどして、かく、

南無薬師あはれみ給へ世の中に³ありわづらふもおなじ病ぞ

と詠み侍りければ、仏殿動き侍りけり。その夜の暁の夢に、貴き僧のおはしまして、「なんぢが歌の身にしみておぼしめさるれば、世にありつべきほどのこと侍るべし。この暁、急ぎまかりいで^aぬ。もし、道にておもは^bざること侍るとも、否^{いな}ぶ心あるべからず」と見つ。あはれかたじけなくおぼえて、まかり出で^cぬ。

何となく苦しきままに、ある古堂の人もなくて侍りけるに立ち入りて、仏拝み奉らむとする程に、輿^{こし}、馬に乗りつれて、ゆゆしげなる人の通り侍りけるが、何とか思ひ侍りけむ、この堂に入り侍れば、伊勢、すべきかたなくて、後ろのかたへ行き侍るに、この中の主と^{あるし}おぼしき僧の追ひ来て、「かやうのこと、申すについて、はばかり侍れども、仏の御告げ侍りて申すなむ。我が住むかたざまをも御覽せられ侍れかし」と、⁴ねんごろに聞こえ侍れば、これを違へむこと、仏のおぼしめさむもおそろしくおぼえ侍るままに、なびき^dにけり。ことによるこびて、輿^{まう}にのせて、男山に具しいたり侍り。ぬ。八幡宮の^{はちまんぐう}検校にてぞ侍りける。いつきかしくことかぎりなく、子どもあまた設けてければ、わくかたなくわりなきものに思ひてぞ侍りける。

検校も、年ごろあひなれ侍りける者にわかれて、⁵みめかたちのあてやかに、心ざまのわりなからむ人がなと思ひなげきけるに、この伊勢を得てければ、心のままにぞ侍りける。

(注) ○太秦——京都市右京区太秦蜂岡町にある広隆寺をさす。平安時代以降安置された薬師如来への信仰も盛んであった。

○南無薬師——薬師如来を一心に信じるといふ祈りの言葉。薬師如来は体の病気を治す仏として信仰されていた。

○男山——京都府八幡市、淀川左岸にある山。石清水八幡宮が鎮座している。

○検校——石清水八幡宮の領地を管理する役職。

○わくかたなくわりなき者——ここでは、かけがえなく素晴らしい人、という意味。

問1 二重傍線部 a～e のうち、意味が違うものが一つある。その記号を書け。

問2 傍線部 1 「経」の読みをひらがなで書け。

問3 傍線部 2 「つとめ」、4 「ねんごろに」のここでの意味として最も適切なものを、それぞれ次の①～⑤から一つ選んで、その番号を書け。

2 「つとめ」

- ① 仕事 ② 掃除 ③ 勤行 ④ 詠歌 ⑤ 裁縫

4 「ねんごろに」

- ① 心を込めて ② わざわざ ③ なれなれしく ④ 詳しく ⑤ 気晴らしに

問4 傍線部3「ありわづらふ」を現代語訳せよ。

問5 傍線部5「みめかたちのあてやかに、心ざまのわりなからむ人がな」は、誰のどういう気持ちを述べているか。説明せよ。

問6 右の文章の内容に合致するものを、次の①～⑤から一つ選んで、その番号を書け。

- ① 伊勢の夢に出てきた僧は、伊勢の和歌が仏殿を動かしたことを責め、出ていくように告げた。
- ② 伊勢が古堂で仏を拝んでいた時に、あやしげな人々が入ってきてしまった。
- ③ 古堂で、伊勢に話しかけてきた僧は、仏のお告げに従って、伊勢を自らの家へ招いた。
- ④ 伊勢は、僧のことばが仏のお告げとは思えず、おそろしいことと思った。
- ⑤ 検校は、伊勢との子がたくさんできたので、長年つれそった妻と別れることとなった。